

である。

### ●初のスパイクベースが誕生 スピーカーへの設置を考慮 禁断の原料もついに公開

では初のスパイクベース、「KaNaDe02su」の魅力に迫ってみよう。スピーカー用のスパイク受けだから「su」。なるほど、達人開発者、小林満さんらしい命名だ。ところが機器用インシュレーターの「03」と並べてもほぼ区別がつかないソックリさんだった。うそだろー！

実は、面や溝が微妙にコントロールされてきた。特許出願済みのsu技術は主に3つである。最外周に向かって勾配加工を施し(03は内側が3mm高い)、4セクタラインで床を支えること。そし



「KaNaDe02su」を上から見た写真。  
正面から見て溝は×になるように設置するのがポイント

て貫通しないU溝(03は台形溝。溝出口のチャンファー加工だ。勾配加工を補足しておく、「内側」にいくほど響きます。揺れが大きくなるので、外側にするほど揺れを止めることになる。スピーカ

ーの場合は振動体だから、外側を盛り上げられた方が響きがちょうどよくなる」のだそうだ。研磨機を傾けながら手作業でやるとはすごいぞだ。

飛び上がって驚いたのは、今回KaNaDe禁断の原料を一部公開してくれたことだ。瓶入りの粉で有機物2種、無機物4種、金属2種を見せてもらったが、国内のみならず海外からも調達しているとのこと。「周波数って比重と関係するので。比重が重いと高周波の音が出

ます」。だからピアノやシンバルには金属の粉を使うのか……。まずまずKaNaDeに興味を膨らんできた。

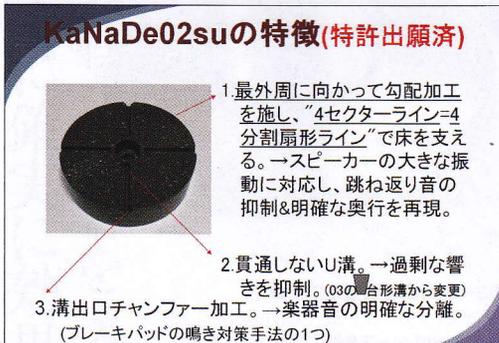
また、KaNaDeがスパイク受けに適す理由がある。普通は金属製だが、スパイクよりサイズが大きいと増振や跳ね返りが問題となる。ところがKaNaDeは優秀な減衰材だ。サイズは影響しないのである。

また素材には付帯音を減衰させる特殊な、変性樹脂とステンレス原料を配合。独自の形状とあいまって、付帯音は減衰させながら、音楽成分はすっきり戻るといふ離れワザができるのだ。跳ね返り音の適正化である。

雑味や付帯音を根こそぎにし  
音楽だけを掬いとつてくれる



【図1】KaNaDeインシュレーターの原料成分について



【図2】スパイクベース「KaNaDe02su」の特徴について



【図3】スパイクベース「KaNaDe02su」の設置法について

モニターオーディオの「シルバー」で試そう。  
suのΦ5・5mm側の小穴にスパイクをセットすると、超低域まできれいに安定する。ほぼフラットバランスで中〜高音もアバレがない。透き通るような体感S/Nのよさは、金属系の高級スパイクベースでもちろん得られない。

雑味や付帯音が根こそぎもつていられ、音楽音だけを掬いとつてくれるようである。これは、電源ケーブルの純度の高いものに変えたような出方。スピーカーの格が、確かに上がる感じである。空間が澄み渡り、「マラー5番」や「フオーレ/レイエム」は、パートの細部まで綺麗に分解して溶けあい、奥行がグーンと深くなったことに感嘆した。オルガンは深く雄

大で、スケールの大きさや拡張されたDレンジには誰もが満足するはずだ。

ジャズは話題の新生マンハッタン・ジャズ・クインテットが熱い。バリバリとエネルギーが噴出する突進力で、ぶ厚い2管のハーモニに引き込まれてしまう。これぞ録音鮮度をダイレクトに伝えるアイテムだろう。  
「シーネ・エイ」はナマ声的なニュアンスを醸し出す感じだ。歌がうまく聴こえ、息づかいがさらにリアルで、コーラゲンたっぷりな妖艶さも感じさせる。  
音楽ジャンルに片寄らない、満足度の高いパフォーマン스는、「KaNaDe」シリーズならではの魅力である。読者もぜひこの効果を知るべきだ。